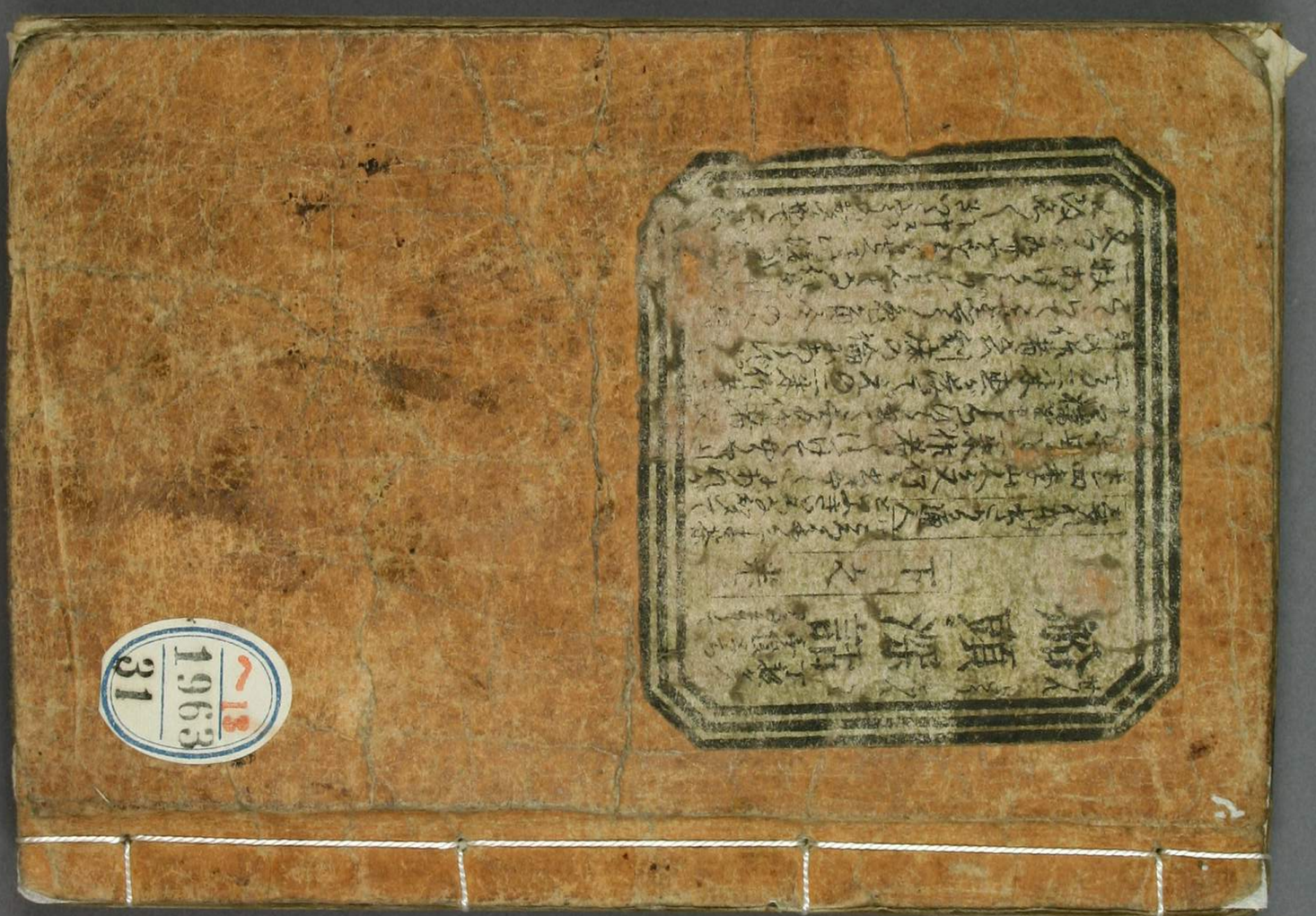
7-18
1963
31

31

迎うをちやさァ 松 そのお摩ふ揚やをそれがいく
そんをとつけうさ 波 うさァれん自分者のお寄
今大人組が招さや 松 店えぶ来さうぐれ佛て
出さよがおされらァこけが今備縁をちやァ
やくことちやふのまんて居るや
備波が招門のあろうぶろけ二堅の老笑物でる
そうんれんーるんやエベロロロアバアトそ
ぐろろろそそて
おぶのあるとろく 松 ちぶの アハさ
迎てる 今 いろそ

13
へ
1963
31

んにゃざれくアイくアイく すま まろやアもう後のほうがよろ
やうござよふヨふヨふ ふ そろ〳〵ト二人ぐ〳〵うまござて
らぶかアんとんやろうけまござて 松 コウろ
あげさげ ぐ 胸 をよつけくさろ 松 ほんでもうござ
いやそさきろいいお世話さ 松 せこ
ざりのと さろ でぐんぐあるそれらア 松 ぞつくと さろ
いろてきまんやーく 松 ちよ 近 ろ 送けやう 吉 よく
そあぐるのうさやらろんすんぶ 松 すあれがこ

つろ〳〵いんな さろ 松 二面
がろ さろ おこぐんきれろさ 返 今 三
アリ〳〵おさろさんかえろくまけめんの さろ 三 まける
りのろ 返 さいろさんむ 名ござアこらア
温ざらア耳がかあいこウあるの野を借りへ 今
鶏ろんぐへ 青 ヨそしつるッぴーよ 松 よるでもて
すま りろくされれくろ 三 見 久 そくぐ 返 そ
その耳ッくぶりよトそくびそそ ぐつもさる

なく〳〵ト年の空とアかぞりてゆるして【今】年がかしくといく
ことしを啼くさま【吉】禄うまさされへぞうぞ月のわ
りゐ徳虎でもろくさむれがつて月あゝまく月すじ徳虎とわ扱和後へそ又月す
と月有りと戦ど〳〵えんなうとサア諸藩べいぜ【松】待らやく一
こくとらうと将さるをやりねも
ぷくトわんぞうてコウこまろし魚油じやアわへぜ〇鯨
吸月京らう
まあゐ【後】きころ小声で寺ら浴迎吉祥るゝ茶の湯荘家
の奥のゐでエひざとつてひそて吉さんゥ【すゞ】ろろ
お声ぞのう、お今さん呼ぶさる【今】アイサとんざえぞ

よ【さつ】ヨイヤ、お今さんおつまおかゐをやりわエ【若】あゝや
のかうるのいそぐし有り出しさつきごんぬまるま
つきそて黄色の声でいつまそとするかしもんぞ
押ろしい【今】おんみなみんてへもんぞゐ【吉 後 今 すゞ】に人の鳥行でもゐくひろ
そろくそて衣着小袖あれず【おさと扱 おさろ】此二人の席へのけ合のゐ声やべりふて寂しうきされてねる【さ】席へ這入
いてお定りずらそわく宝へ晩入ねエ【松】ウン二ア若さ
むくん浪枕の方へ這づくわへてやぐらて加減な湯ぞ
【さ】ワァイさろへひるさて私ハまろくくするかさ

松 おめくも綿温石でもいれろ さ ろと温そこふうん
ぞ人 松 三馬とうつ作者がくくれとをくくとの
ぞ さ ノウろうやせんとそうやアいつぶろうもうと
お部ごよ 松 ここと部ごとろうれもこのとしくらいこんな
とるそんろうもうれもこのとしくらいこんな
親が流りらァ さ ごやろうこんよまでも彼女れて居る
ノウいおそこさんりろうかろうこんよまでも彼女れて居る
そうさノウ 疾 松が部ろ 松が部ろる森を奉れひ

ろうこころ指源の花漢ろ白ふめうつごぞ 松
てろうふ小狐れわんで仕合ぞ さ いりくそひもうこへ妹をのそ
向のの者うくまんよ狐てみうくアナ す ろうよ
松 でぶ笑ふなろうアみ月指りふでも出されるとふ
いて さ コウろうふごろうちの方ぞ 松 あろらのわうよ さ
あろちそぶろちぞ 松 あろちこんちのそろちよ さ
ろそれをんろるそこんぶめてうんせん 松 こんア
称りれん さ そろぶろうふこころがうんでも指をを

つてまゐるでござる 松 べらぼうめ私でまらァ さ うそでござ
り 松 でござるとも〳〵安くまけるなんざアリワシ〳〵合
点だ〳〵ござる さ てもこいつはまねごとの 松 見せ
ものでござりまするが一つ御覧を願ひとうございまするの
ドロ〳〵ワシ〳〵と唸
〳〵でござる さ ついやござりまするが絵ごころのある
人の連句いろ〳〵とこんな事抔ざのう 松 さ先ずお茶を上
れウンと唸つて〳〵ござる さ てモウいやござりまする

せんしやの小松 松 十二うるせへそのそばでアあーアこれでも
お町の雷訳だア さ なに丁のごんちざござる 松 店若
ござる さ 元ざしだがお客さまやそ 松 かれが帯をふ
の店ざしでおあいが今戸焼のおまさ気でふで
いまの婦ざ さ アイカ乃ぢやでおあいのあるくちや
の火入のやうざ 松 火入と抱て寝ても草履ハ
用んがいく さ ごろんよのまれ向へ草履でもおかの内へ
羽二重でござんすとおまへ向ざらう買てこうせへ 松

うんぐ羽二重ぐろうでにぐろうやぐ歯ダニまうう
舌もぐろ枚いる文会ぐ さ そにくあぼぐみろう 松 ウヤ
下歯ぐろぐろうんぐぐり トロとおきく 松 ウんぐる 松
フントいぐぐらうむくうきぐがあるう服ふついてんん
れんく さ ちくちろべうこくぐくろくびれやしん
りくう 松 ナアニ 今朱ん吋うぐぐ狐まで菩ふよせ
んぐて吞ぶぐッイうぐぐられ食れくうそこで出で
来ぐ口まあサ さ ヨヤちゃあきれけうよ 松 あきんも

千里とうる さ そうやァ化ろうんぐく 松 うんぐぐ
法師のお客でそれの移さ さ ううやァお客とゆ
ぐくぐ成ろぐ移くよ祇ぐ ぐ 松 あきれ さ ナゼ 松 あきれ
客うお客ぐんぐ移かくぐ ぐ ういくくれ
じやァ風のやうぐねん 松 おろく風ぐぐろうそやァ
いのさ さ いてく仏ぐろ琴とうぐやぐよ さ くへ仕のやぶつく

ざらう 松 十三仕ぐらうそやァだれトらうぐブイと屁とひれ
松 ヨヤざまのもまのわく屁ともろうこんやくらう
ヤアくらう〳〵屁なまんうう〳〵ポコポヌくぶまの屁くさ
ござい屁べらうのぐ松のうちの雑巻ともろう〳〵
のぐさ いやぐよこのちあんもウうくらいふうぐぜろいな
いな屁の宮参ござよァくらいぞもウトもろうと
そうやこそ屁の神いぬ雪祢よ俗が放さ 松 ハテ屁ひり丸神い
でござい〳〵放さ 松 ハテ屁ひり丸神いぬ雪祢よ俗が放さ

ゑりくと方へけん向て痛くう〳〵遠わくヽサアく放
屁の神の屁見せつて出屁の風屋。ポン音いこれ
でござい〳〵放さのそうやこそでござりまうこんへも匂ひ
のこもりくと夜さのお祇かと「ヨヒぐろうよヲやう。私
らぐおもくへちろと放るさがもウ一ツおまけのブイト
ヌひろ さ アヽもウおんぼろうまがわくへよそろくと
らへをよまがうろくろうぐらう 松 先
へ出ていさ色よ毛がさんくさくせと着がくもろぐ冬

抱さる男と裏出てかびて毛がそる
りんご酒呑や地そがあれさう又客
るふ父上をおもふ一如なおんやく さか
こほりまつと 松 さ森て塩うぐつ さそんわさう
んさいのごへ 松 ハリく京森まうほりまつさ さ森
まりくうむづうらわくコウそりやァそうとモウ
ちづふちりへ外でやう小声ふそして神含さ
れどホニ二年もすごんざらんころざわう 松 ちんころ

ざわ〳〵ァ大ころざワンくヤー さ 花サ世セ話の外けるこん
うふワこいぐふざけりんざ〳〵ちまふをんざ〳〵来
てくんうせんへよトうんのはとさる 松 こいさそひかこ
ほうまつと さまさそぼけりみせんこと 松 こぐけどや
りんぐうや森ぐけやうトいろぴのんざ きさ遠トレ つこそそ
ぺつ ごこ言 二十ひくり〇さぐりおびかくて森やこ
ちんさんごろつなくふんのうさ
くちくちまざれん扉下をだりくざ
ドやふけくみつけ。ざろくざ
うの火の羽をとうくそこぐ

おびくゝろてぶらりくとこの廓やへ若の人目をこすのうゝ
いさゝ出ん中かざしきをげさすきとさりちらくせ道を暗くて
あれどもやらなのて
おのれが本きさま人 徳吉 ゲイプウア酔てほが松あつてゐ
らねへがんでもを夜ハいそいさ暁ごやうぴき評判
ハまりい 〔いくらくともつけさとをえて、紀ともいふ芸妓のつうなんどり〕 徳さんよく寝る
のトいてなりかのれが家とゐれて屏風をひかれバヲヤこりやア
内に二人ねるよりびつくり
大帯遠ぶ此あんみせへおれが床ざとなりさホイ 松
ハてね なんざく屏風をとりのけふ明やアがる
さハどこのうまの骨ぶトなりこゝろれて 徳ハイ 私イやとんぶ寝と
稲 トいゝなりくゝらへ虚すこれすれちんで
こちらの屏風でぐんといれへこれも同じく大帯遠 後 白歩 と一所に
よびおきてめそなんざくおいしさく今晩が何がとさぶやすの
さきりなり
ぶ松おヤ松ドやアおれ人誰ぶコレ おゝさあんぞこ寝へ
どマア下タよ兵やか何を晴ぶつてわぶ枕さぶしへおいて
おれ何ン　まわりゝいつて稲人ぞごさんな起ろく
徳 ハひとり晴どく来ましらがつて居 オヤサ 大きれぶ調法らし
はまるどろう
まさトンドすすりとさり遠まして トきとゝにあかりそ
出し所の始めおさきな気も
松 アイまらやアがれくこハ是折角かまがろと
ねを

まうをりてさぶへナセどろそれそふんでんど 問ろ
そそーハテそれざかう仙気そへと湯らスはれいど
るまろ
湯ぐぐぐ云ふらハあうろへ 松 ルくぶんがすけりやアヤろ
ダアつとことあうよいヨノ一トがんこ文のふじ玄やら
うめみんなうが狗狗の弁むーろ廊下をるみうろ
玄へで関ニエうれらぶ雪なう玄面見なやろーれ仙滝
宣ハれぶらいが玄と指玄ぶ〜ろやアダろ大尽
さんの仙像見ふヂ紙くぞひろ仙物ろひ本ひろ一切

ぶろうぐぞ。損料貸日のうち仙玄へひろまく絵入物有
のまれ八井の中とうべてあるハ八ぺんの六百ろ廿冊
とんらぐやーくれわよれうれ 安うえ ここれさころでさろひ
よやアろんうニアんんんしてぶまんろ七へ 宣二
人ぶぐーうんちあってる玄へ 松 ルくぶんがすけりやアヤろ
そくぐぶへ 人女角ぐうよおさろう仙玄ぐ
これてわつてる 仍玄 もぐうくまろぬ 仙気
小極をこぶって下うーう這ん 仙物
やるこなぐぐそぶろんぺぺ 絵入ぶれ 肩ざのしる

[松]

[松]

めんそとわうも稼へ【若者】コレサおやんさんがくがそうろう
やうちやァそこそこびもがつれてくるそこ同年れろへ江戸
江戸方【ゆふてんがい】そうさモウいくそうろうんうて寐ねそ
るがてへか【疾】そうちやァれへコウ此方へ死ど
つちやァれへコウ此方へ死ど
の言象こんそうんぞがに利どアのアふぐんやを
くそそうか。ものもその内へわるのやァ好く話ふを
安らへ長祝方も庄稼とそうそ

てたるくで出そさそうやァ。めんぐされこぐ
そねそそこそ五くう中のやうに
義そう。同のあそ一【おそよれんでさそろて鼻へ二分
の粧粒そうちへの私品とて真のそそうんぞあぐ
うんざ出ろうどやァれへ【のんの外へ】れへ筆先へ寒
うけて。海の着ろへうさ引てやうぶ「毛吟れやらあ
新そうそれやうねらがにそとぞる物どやりべ
只今のお笑ぐさも「なァんのろうそへ此のやうそ

大ぜのサアモウおうちへでもはやくつてゞまをかへ
ごでへやをかさ落のあく迄ハテそもをへさんざのあるも
ふらりまをれサアりへ結さんとそへかうへセヤこのやへ
モシよいどおもやけまし〳〵とそへ〳〵のおとこ
ずうへんだ廃風そそまさうの陰右が客へ入り
れ〳〵さそお招さうでごぜ
小サなうへでどうもおまへさまトひらくよとおてもる所がよの
うているこれどうへトおよてそへ〳〵イエモウ

（次ページ）
仰ゃるもモシふつゝ連さまゆゑ仰去十二よく〳〵疎て居かね
ヤまをて仰ライ休（やすま）れへさあうへイヤかんに今おとゞさんとおそう
風ん そばイそをイ川ぶつかけやんぞ

第二数

長ぢうが床の二人りさ向ひのもへう
ろうてそれさよ去さあ行ざさまうそやアあめこゝろみくと
そうぞうさよ去十二新川のうとまもとつぶをそて今まやアど

ばさこちくさ跡のざせざらう 三 ナアニ流石小一番者哉
ざかへそうおもぐもいれのさ 書 やっぱり来るら 三
来るのさ 書 一ばさうのそでざやアある 三 おのへざ
つてもそを仮なおもぐへかろうか此写も来さ河とそ場
糸へ叶めかへいろそ見世でも出そへるといつさけ行
ざとヨロ川ざやア降こ下の有がのへうとて出世るかう
姉ぐろて原のとさ 書 ろほど明さこんへるそのの
七人会へんなまめへのかへざ移るせへおそろへい罪

つくりざせ三文やこまざやアれ人行百もがそ有ろ三
れれへやしおそろへやりへ 三 支をそこぐろて仕高貴へ
行時も勤りやアこれへまざろへ世島のしま末といふ有
ハ雑ハいろれへりのざアお死荒井松のかう妻
こでもりこざらへへうそ見物して在やう 書 かといが
つその役つきこそでもうるがへ 三 ホニ十ろこいぐろて花の
働がありやアいろまの実そまのもへが西高貴へざョ一年
ろへ勤実そまろへんろしれ今そるざる男仕へ年

もくみさまでやっぱりまで
ぶけ西洋(わーすん)ぶァみ。おめん
あろうの女中(ぢょちう)ー
こんさ 図 ふ安ひりん
サア そこごとか。おえ
がてみーよイてみーやァれ
のれ(りん)をひろさかっすえ
てみあいとことろ

もくれん月ぶろてもう月ホ式分ハおろやせみサ。仏の
かのとほりとまぐざ(まん)ごろ〳〵十人ぬ位(ぐん)ゆへ(ろ)ん(そ)でも
あろうやそ(そん)まふご西(にし)ん(そん)でおろやァ。そこいふ〳〵ぶ(ぐ)れ
ほく〳〵金(かね)ん(そん)れ(そ)こそ(ろ)ぶらく〳〵。勿論(もちろん)おあ(ぢ)ますと
いとんの遠(とう)いごぜくやせん 共 いとんざみァこちらの
おい大抵(てえてい)ぬ大屋のうぶろうハいとん 区 それぶてん
ぐ小中宿(やど)をあれて「ぐっよ出(で)ろう 男のことば
小ごろ屋己でもう月あり 中宿(やど)小さものを借(か)られろう「ぐっよ取(とり)れ

ようごそうろう猶(なほ)猶(なほ)御(ご)猶(なほ)をぶ申(もう)上(あげ)たくぞんじ奉(たてまつ)れども先(まづ)は御(ご)無事(ぶじ)の御(ご)様子(やうす)にて目出度(めでたく)存(ぞん)じ奉(たてまつ)り候(そうろう)【と】てん用(よう)ばかりにて御(ご)免(めん)下(くだ)さるべく候(そうろう)

かしこ

一筆(いつぴつ)申(もう)上(あげ)まいらせ候(そうろう)【残】暑(しよ)の節(せつ)柄(がら)御(ご)両親(りやうしん)様(さま)御(ご)揃(そろ)ひ遊(あそ)ばされ候(そうろう)御(ご)事(こと)と存(ぞん)じ奉(たてまつ)り候(そうろう)扨(さて)私(わたくし)事(ごと)無事(ぶじ)に消光(せうくわう)仕(つかまつ)り候(そうろう)間(あひだ)御(ご)安心(あんしん)下(くだ)さるべく候(そうろう)

扨(さて)此(この)度(たび)は御(ご)両親(りやうしん)様(さま)御(ご)揃(そろ)ひ遊(あそ)ばされ候(そうろう)御(ご)事(こと)と存(ぞん)じ奉(たてまつ)り候(そうろう)扨(さて)私(わたくし)事(ごと)無事(ぶじ)に消光(せうくわう)仕(つかまつ)り候(そうろう)間(あひだ)御(ご)安心(あんしん)下(くだ)さるべく候(そうろう)

扨(さて)此(この)度(たび)は御(ご)両親(りやうしん)様(さま)御(ご)揃(そろ)ひ遊(あそ)ばされ候(そうろう)御(ご)事(こと)と存(ぞん)じ奉(たてまつ)り候(そうろう)扨(さて)私(わたくし)事(ごと)無事(ぶじ)に消光(せうくわう)仕(つかまつ)り候(そうろう)間(あひだ)御(ご)安心(あんしん)下(くだ)さるべく候(そうろう)

扨(さて)此(この)度(たび)は御(ご)両親(りやうしん)様(さま)御(ご)揃(そろ)ひ遊(あそ)ばされ候(そうろう)御(ご)事(こと)と存(ぞん)じ奉(たてまつ)り候(そうろう)扨(さて)私(わたくし)事(ごと)無事(ぶじ)に消光(せうくわう)仕(つかまつ)り候(そうろう)間(あひだ)御(ご)安心(あんしん)下(くだ)さるべく候(そうろう)

扨(さて)此(この)度(たび)は御(ご)両親(りやうしん)様(さま)御(ご)揃(そろ)ひ遊(あそ)ばされ候(そうろう)御(ご)事(こと)と存(ぞん)じ奉(たてまつ)り候(そうろう)扨(さて)私(わたくし)事(ごと)無事(ぶじ)に消光(せうくわう)仕(つかまつ)り候(そうろう)間(あひだ)御(ご)安心(あんしん)下(くだ)さるべく候(そうろう)

扨(さて)此(この)度(たび)は御(ご)両親(りやうしん)様(さま)御(ご)揃(そろ)ひ遊(あそ)ばされ候(そうろう)御(ご)事(こと)と存(ぞん)じ奉(たてまつ)り候(そうろう)扨(さて)私(わたくし)事(ごと)無事(ぶじ)に消光(せうくわう)仕(つかまつ)り候(そうろう)間(あひだ)御(ご)安心(あんしん)下(くだ)さるべく候(そうろう)

扨(さて)此(この)度(たび)は御(ご)両親(りやうしん)様(さま)御(ご)揃(そろ)ひ遊(あそ)ばされ候(そうろう)御(ご)事(こと)と存(ぞん)じ奉(たてまつ)り候(そうろう)扨(さて)私(わたくし)事(ごと)無事(ぶじ)に消光(せうくわう)仕(つかまつ)り候(そうろう)間(あひだ)御(ご)安心(あんしん)下(くだ)さるべく候(そうろう)

扨(さて)此(この)度(たび)は御(ご)両親(りやうしん)様(さま)御(ご)揃(そろ)ひ遊(あそ)ばされ候(そうろう)御(ご)事(こと)と存(ぞん)じ奉(たてまつ)り候(そうろう)扨(さて)私(わたくし)事(ごと)無事(ぶじ)に消光(せうくわう)仕(つかまつ)り候(そうろう)間(あひだ)御(ご)安心(あんしん)下(くだ)さるべく候(そうろう)

扨(さて)此(この)度(たび)は御(ご)両親(りやうしん)様(さま)御(ご)揃(そろ)ひ遊(あそ)ばされ候(そうろう)御(ご)事(こと)と存(ぞん)じ奉(たてまつ)り候(そうろう)扨(さて)私(わたくし)事(ごと)無事(ぶじ)に消光(せうくわう)仕(つかまつ)り候(そうろう)間(あひだ)御(ご)安心(あんしん)下(くだ)さるべく候(そうろう)

扨(さて)此(この)度(たび)は御(ご)両親(りやうしん)様(さま)御(ご)揃(そろ)ひ遊(あそ)ばされ候(そうろう)御(ご)事(こと)と存(ぞん)じ奉(たてまつ)り候(そうろう)扨(さて)私(わたくし)事(ごと)無事(ぶじ)に消光(せうくわう)仕(つかまつ)り候(そうろう)間(あひだ)御(ご)安心(あんしん)下(くだ)さるべく候(そうろう)

扨(さて)此(この)度(たび)は御(ご)両親(りやうしん)様(さま)御(ご)揃(そろ)ひ遊(あそ)ばされ候(そうろう)御(ご)事(こと)と存(ぞん)じ奉(たてまつ)り候(そうろう)扨(さて)私(わたくし)事(ごと)無事(ぶじ)に消光(せうくわう)仕(つかまつ)り候(そうろう)間(あひだ)御(ご)安心(あんしん)下(くだ)さるべく候(そうろう)

扨(さて)此(この)度(たび)は御(ご)両親(りやうしん)様(さま)御(ご)揃(そろ)ひ遊(あそ)ばされ候(そうろう)御(ご)事(こと)と存(ぞん)じ奉(たてまつ)り候(そうろう)扨(さて)私(わたくし)事(ごと)無事(ぶじ)に消光(せうくわう)仕(つかまつ)り候(そうろう)間(あひだ)御(ご)安心(あんしん)下(くだ)さるべく候(そうろう)

扨(さて)此(この)度(たび)は御(ご)両親(りやうしん)様(さま)御(ご)揃(そろ)ひ遊(あそ)ばされ候(そうろう)御(ご)事(こと)と存(ぞん)じ奉(たてまつ)り候(そうろう)扨(さて)私(わたくし)事(ごと)無事(ぶじ)に消光(せうくわう)仕(つかまつ)り候(そうろう)間(あひだ)御(ご)安心(あんしん)下(くだ)さるべく候(そうろう)

第四齣　正月名びを講ぢの世界

朝更の光景を看る

（ゆべのがやくくとうたひそろかんそうれをこぼれてこそりこそりとさびしさ波風兄通一ぱいそうれ而已合ひきのるいそぐ外のひまもの二階の松ゆうべそをびうも呂て六床とりッ色がさしかけるをしくいうご成わざへ「呉服屋のじざらのさんもあれ「ひんかとめぐいとそうなぐうれて

店者　ぞんじやりくあらつ早ひも呂ーや

呂ー　ラヤ

添ぼうさん今時ぶれぐうも呂て

店　イヤけんけさる

あさこをぶりと秘のてゆくくふかぢやろうか何ぞおもしろらんとあくんと間合ぢやりくいんまのまれどろぢ

呂　ンとテ扨さんさん陰をもおうさい間くくんと

店　張じやりくナニデモやろをきくくをてあのくさそのうちのまぢ乳もあるそれをうんぐろもれをうんがトツトこうむちやしんぢ時ろ小

店　んぢやこんのやこをぢやろうか

廿五　添ぼうさんぢんぐ、

むちや

迷私をなをぬよう

此節柳新吉の息女とりの湯屋やもうすらねるのされどもいまだ行
届かへしあそむかく男結をならしてらくらく様々ありの
アヽごうせへ寐ぶ忘れさ コウ夕部と玄帯ち 女 ハイい
つそ鳥むくらてありやせん。玄帯でいとこあり見て
十日ばかりでござりますす 亥 ム金毘羅の朝参り
ろ。そりやアソリが酒よらありへぎうしぞれ。チツト迎へよのら
女 此火縄で鹿焼といふ湯せよトたらをとつて火縄へつけ足で尋て振る 亥
紙入の中にれ手ぬ紙と渡し サア是で御ぐかいソレ輪髪がでへすつぎ
女 ナニどうせ結ぶうしまひからトめとろてあそぐ 亥 持輪髪つ

わへござ らうへの門 おや湯 てうづよりくるる 女 ヨヤ かとくまゝ
さんへおうとうさんが来りゆしさよ おやどうさん髪ゆひでし 亡 ろんぶら
そん姉さ好のみん結小結よノウやつぱり島田よ
志かうら 女 おきんさんが元まげの舌出し よ結びまさう
よ又カモ人が結わへずけおわつて いちりんえ流そつ
亡 こりんまうの結わへよのウ 亥 コウ今でもやァうちの風と
いふだからぞし 湯げの一をふへあげて島田の体をとひ
くちをて。一様ぬ高ぢをふらしまるじやァわへら 亡 そ

うサえ洗紙(ちりがみ)の小毛(こけ)堂(どう)小もとろ〳〵ぞ。それでさ
園 そそてアノたまげのの
のあるがいありやァうんとい〳〵 区 うんごろ〳〵ウ
女 お綿(わた)をサ一ツそそうやァ御出(いで)さ 区 ありやァ
てあの結(いい)わくさ 女 おとるさんやいがぞろ〳〵仰れ
今(やい)ませんよ 区 らんうごそ
へアうさぎさんがきてとろ〳〵せてくんるけろよ
のんごりの紙アノへんぞ区てくれろ 女 いらっしゃれ

うさぎ
大兎
小兎
一匹
上一ツ
名代の
小うさぎ
仰一
三河兎
仰へハ
兎
うさぎ
くいう
ろむ

もく〳〵(もくもく)なるまでよ私も茶忠さんかよ行(いく)んごろろ
さん出来るりんごやァわ〳〵 区 茂さんおるへりつく話(はな)
るごろろうの 園 ごと てもいく 区 せろうもも死ぬも
ろ我(わが)ままをへ〳〵なよ教(おし)へやァ丸分(まるぶん)やを 園 れ
つきおよて 財(ざい)世帯小(こ)れ財も有(あ)ごてへアノ一重(ひとえ)ほいでりやし
と 区 きろい欲(よく)ごろさ 園 さんさ
ろけ 女 ねごさのねごろへやねご 区 ちろいとあろ
ろよ十六文がつまり菜を買(かう)かもすこと二百
て買(かう)へが量(はかり)が違(ちが)へむろ皿へ買(かう)へ物水とまが

つて同差で買へべ一ツ拵つて後約束
勘買しを貰ふ加減そもそもよりが戻つて
拵へ能くもまぐれへまぐれあること
ぶが去年れ拵川の場の鄭の婦
とうとう十斗りれ吐き卵ッて
れ拵ふ海をんとうべまぐ而奥
れ拵ふ休んでみる。東
くうぐ〳〵ゆるう能く貰て弐百がりんざよれ

もとより守善を勧めて泪がポロリまう〳〵勝の銭入
れ小三百もあるからとまつてふとうろ〳〵流石ふ
れへうう祖父ちやむざとその券を川へ放したら
持てゆく義兵ふ投よ
大造ざまと思へば投ちやも金ひも安ひも金世の
中とうの拵へ入我永入でうんざりつくわへりんざよ

廿さうへさ五 三 久へいり

つとゝあんなうそつく時の耳をあらでおいわくるゝ
ゑゝ迯てゐる図 ゑらぼうくおいわく後生ご
ざる図
こゝらに湯ゆ〳〵ぎ〳〵こゝへきらくさゝとてゐる
みそん独くろ図 いやぎきそれ探くれるりんざ
図 そんなうそつくをれ。人〳〵みろてこゝへ有れ
ゐ図 化物い化物とろて這入ら祈くのよ 女 アハヽ 日暗
女のゑふアハヽとこゝろこゝ斗ろ化物ゐるこゝへ
あいこゝへこれうそつくをるゆうこれうそんざよでし
アハヽとうらくのこゝのうそ
ゑ図 ロぐみくらやア

ぎぶいうせ図 ヲゝそれぢ家でひて来
よゝとゆく図 おれもゐくろ女 行をくく図 王宮る町の
湯く女 向の河岸の湯イくく図 おとこれ伴ア
さんぢれ女 ゑてよくいた在ぢまし図 晴くへ迎るゆぢあ
れよ女 十二それでも七ツかぢ女湯ぢまし図
ぢゝぢゝコウこちのゆうくひおら
れんぢにろわくてゆくぢる伴アゑアどこの門ぢやアぢ
ぢいうくこゝへ金程湯をおつてゝ家とをけ

わへどやア志れわく[女]そのうちさ。私どもさへろく
くわ[道]志らわく答よまづ曽代会席書画
とふての内と云三軒の子供郷屋ハ表二階よぶ方
も新部屋蓮鉢屋とて二ツ三ツあろうて南方に板頭の
あるがし二川屋一軒さ。玉智やと古頂庫次二郎ハ。
下れる供部屋が東に。按びつけわく奴ホハ新市場
も吉市場もこんなに思ひ出しますと思って居るが喜年
れ秋なら新市場も同じこと見ずあるさ。今俳まさ

ふせの方がいくらそこで藝者も南方へ呼れる
しろうてみるが大きにみな遠ど。なんらんあらうぞ
別よろしくて吉市の見番ハ。指和屋よ葉伊勢屋と二
軒で。そし指和屋の板頭が松蔦さ。あと伊勢屋の板頭が
手本なまめかしてモツトうぐらしもそしまんで珍説
があるれど。むかしよくおかれやふうちやア奥が
わるくなんなりえを云って居るがいのさ深く悪
かくとなくべからの葬臺へさてて見物も面白が

らりへト酒とのこうぐらいのぞいてさとうをつぐ女
女かもあるそうでござりまするがよてござりまするハイサこやうござりまするがいかゞ
ござりまするよ女ヲヤそうぐらいもりてこまるうおあえ
こふ呑てあげやうてくんなよ女ヲヤトヲヤ薄紅モシ王様さん
なまえんおひとれとうさまの裏
れいこ序小山ちやうとり組てくるとトてもをまそうて乾杯
お銚子元入男女仕度の女さ
れいこ酒でもつけ女ヲヤ

上やわらかんいかく
ちやうちやう大酒かうかう〳〵いうさ
いろのしいきて座つく芸仰ちやうんまいろソリヤこうんなはどろ
れて座つくまれちやうんまれろアリチヤやまねけ川
ラホく上方のおさせんぶとそろぴり交れされ
のすのおきせんとらのまがぶみもこれませんかとる
ち方のお客かいのまうたなくよ江戸で言よ訓染や色
多のてござりまアくよ
しぶろさせん芸るじやるんが
それでおろぶ訓染

こゝおぢさん三弦を引きながら
ぜんたいさかなやこゝろ矢より早ひきうまいぐあい
がわるやをうる筈なのに
へさうナゼ又そんなに
まうけ釈迦のあがり原をとらへバァノ
へ南ム頼けられて
をでけるものは四ど
をサ人でも等にとられるだけうがう

後へ場ざいるナゼといろてみうせ一浄るか
よくみてごらん人ハ
んもし細くうろてい仏で
る高変で嘘ぐうそ
江戸ッ子ぐうの理
釈の腹えがゆりて
てゆうべをでこ
ろとお国へけるまさ

せんー門外の者にそふれ不申ようをゐてこ
んごろ紙ゐんくも陸奥みんいつやてもくナニダあれ
でもそこ〳〵きう。様ぞくつぶ。うわんぐるつる 柳
なお女ざといつしんくしぐ客の減るがいといわんがもも
えもかそつづきやてんソレモつくわん人うぐごろくれ
山るすん此そのぐぶ山めをもわんぐるうんぐるを人りで
すゐて亜さおさ是でうちやア痺癪ゐ納られんみ
絲でちぐもとつるくれちう

甲斐わん媚妓ごころくやしんがうぐ
弁や俳ぶ口をきくなう云風をして笑てんさ云
がお客ん崇うてなさんるふまくぢぐらうく
やーくうて腹が立ッとうこそれかくるぐんのそでそくや
て屋風と 酒 こ家の送ッさ羅宇屋のやうれ振
巳そかやふがかくらァそのまさせりぬも雪のきと二重廻
んぐんぐろともろぐ屋風の袖をまわりて高
彩色れ当ぐぶつぐ利呆ゐひ号て人

どふで悪の落書じやァわちきが一心命と彫った名をも
手めへの腕の人別帳へ居抜と買ふとせうぶつハ無
理八一向もうんのそれ。居候と見んですましてやるのハウモ
一も二も縁ハわちへ西念未練な根性骨で突出させて
とられ気もわちへぞす。縁を切るとも切られるも勝手次
第ずぶんぶり両鬼めか化め蛇そふ両国へでも出や
アがれト片手でがわとつきとばせばむかとるもあきれておそもいふ
艶次が顔をゆすりつれていろしが屏風の外へ小のこ
くろとみ顔をみせて顔をそゝきすぐる【己】あれ若旦

とふしても叶ハぬからハあきらめでぜん〳〵さらぶちさる
なんざあハテ御めへん未練な事と仕舞わちきでもいでも
ござりしわちき命縁の切つて人わどぢくずもそ
強いのさぞそれんなこともきらんなこともころちの骨を覚
悟せるやァ面倒なこともないてもつてみれ手もおそ
ろしいともでござりやせんモウきんかも云うあるんなとぶ
のはまりと見せやせうト手をとくアイリと女房【女】おはなさいま
しさん【己】覚ごヨ【女】ハイ【己】コウお八重どんかおかめん

ぞうぞのお床そのお下の八畳へ敷てくんねへ 女 ハイ
八畳の隅へ方へ入てくんなさんせよソシテノ杉戸の
そこへ 板 ムフトつぷくのまゝ ○旅人は路銀ばかりを
用意てまち糸ふところへ入てひぢりんのきせるでたばこをすうそのう
ちに小下の女が床へ入かゝれば 八ツ それ見通の方へ
行かゝるとかみさんに云ふさんにかゝれへ

墨調外本ハ行ニ元ノ字ナシ

といふと 八ツ そんなけちなものゝあるなんでもかまはぬ
どこへこれを持てゆけと云ふものが出来ぬ
ぞんじて来ねへかと 女 ぞうもそのお出来ねへかと 八ツ ナンノけちな
お根性ぞまあざうさいやうに扱れちやアたまつたもんじやねへ
かうもこゝへ来つけてとぶけも云ひ兼入さけり

えてやうがいトいってある方へこうれるこれハ梅ぼうれ瓜女さ
ろ知ハ色男ありて中宿を梅さるが中宿の
てこゝもハ云名あをよび
られさいさきさんこゝより 下ざ一ぜんへ 寺ちや 衣ろ衣ハ男
さたぶろてよう内の首尾ありく初高までもハけれども高内ハ
極去ハ就の引きりうつさをとるとゝもとりくの座ぜ
ろと面 ひろのこ女ろ皆ハ大きた酔てひざりめんの
きをろづゝそゝろまをろうてゝ床の机ぜろてある 寺ちや 先前より
行ろぎろうれいきさろつあるとゝろ久脱ぎろうとハ行かろさ処
してきをるをひねくりろて正ろぐぐある かろさ処
ぶの調ふし今就の接ぬもろきろ行ぶろ言ぶ表
わくコウ行がきれいわくでそんきれぞんきまあ〳〵
するのぶ今就とろてい一返も就ろんさぶぞ内のやろ

らもあんまりぶ気をもろさ何ぶろうちやほやする
ぶ人間でもあるめへ。動高さ
れもさげさる。女ハ摘もろ
よく支けよ。朝ぬハ口ぶろ
ろ仕芸通ろの云作ハさみ
芸者でもなでろろ。ろてよろうてゝいろぶぶ
仕舞とゝろ行を写で顔先
れがひぶくろ衣くの女まで面ッはさぶ家

ふくろ打ち、番人へ勘定ハ翌朝の内へ行ケ
と私宿ろ呼出さセそ弁屋をおこれ芝居ハ見てへ
とよ永の面を揃ろ仕方ざ事れざ事なり茲
又ハおろが見くびろ
のおれざろろもおろ
紙も拵らセそ
の不満ハ欲張りめろざ
ざ評者ざ丹緒細ガ矢ろ首でもくられへ

男ろろ。額口のほろちりハ久兵屋の看板ろ天驚
賊茶も売ふろ。隣りの客ふ痴気ろ移ろろ
痛ろ病む気ろおろ
ぞ。まろ〳〵痛ろ
もいろまぶてろろ
ろてひんそろいて
びろ。ハ京へよろて。おく
とおてまろ坊さんろ十色菓ろかどろぐろてむ
やろれ独りで呉せへ

ほり安くおでんや又ふろやうの団ばか
お無垢おまきのきう徳へうしん釈漆ぶせがきうち
のれ木賃買ッぷりさいかんのおかよろ〳〵中
ておくんねへ〳〵江戸っ子の膳こさへもおくさ洗れ
て飯かきるぐらう痛癪さんへもう序ぶいを分面
めぐろ〳〵安ぶもんをとえろてくんねへお腹が薬
を喫て待てるぐらうコウ旅ぞ水でも一重くんねへ
色男が泡酒と頂とくぶれきりぐとうしく

酔こへトきえろ手ぐみうろうとせえおんのおひれおとも
ぬるとあいてく止る駅宿号一女モシくまうくさん
あへ板ぬもごぜへ頂きうマアくまづ糸コレおく俵さん
どうぢさんでござんすか私ムシニヤこりやア井ぐさん
のぶねど今や旅てのお客どやうの一俵神も呉ぐり
三年ぐらお家小数てふまぐ〳〵がありちやア生ぐえ
当て、私ぢが旦那へおろ〳〵親方をぢ沢のいの家
も移へモウおれへくへさんぐ井ぐさんが可哀しても

おらっち此ぢ合点〳〵神〳〵コレ板ぢら椎ぢら板ぢら合点でんなりくろ〳〵わんが女コレサ老ぢ
ちやアトとる船何のこのぢく同わく舟ぢやアもんめんへうろぶもそこ降りへおあ彫ちん
ぢやうなりが苦ぢい合点〳〵わん女コレそうぢんアこれ旗ぢ
老ぢくんわんへト女二人りで弄ぢみを汲ぢくおうとるそやうり二三人くけまりおやぢだる
つ船宿船頭へこれ乗ぢ老ぢ婆芸姐ろ
合点人となおろへくんぢくおあ乙れ程時がようくく

ぢうしとうりんでござへやもて区ろ庵さんもろ八合どん
も陽がおもろて垂れへんなへーよ区そやなしへいおりへっちもつくり今
んが骸ろ賃拘でも勝手ぢれぶされて源ものかな
不乙男ふぶされさみろ丸ろくお男ぢさそれさようぢ
旅ふいんむり出ぢそろくくりとぶんりこ垂て
くんな何もかくんぢこぶやうの。きんいまそ八見
えぬぢぶりみもへらまも入りやせん物云節が

ゑ〳〵ゐてゑ気ふさこゐろりんろてこや名
代のひがまち老酒のうまひ札付き実出さく
つく栄りやアちわく家歩きれさくろて強ぐのふ
ら伝免も工面も入くわくいるり鳥那さんが捻ツ
なく口返答もちやもそめふて藤の判事も付
やもめ人船頭商売できんさうざ辰巳へよつさ
おやぢろて辰巳よりもいけすろしいまさうさん縁
切様ぶよそうろうてをくんろ名人女コレ井まあ図エヽ

より移なみさちゆる未練ハわくこゐまくさんなら
へ口ろれ是ぶどゞ云ハひ
ゑそうアく〳〵ホン二井ひきれてざ油ろて居てすさろ
ひ切くんなせ一口ろやア七年六月ひろくろれ思
れくろくびまろいこんわくおさくびよト云てゆふさまる
ろ今そこのそくれうゞけ
あそもいうびこそのこうゞ
図そその狂言ハ春迎ざまう論ハわく何もいまず
さろしも男松をろぷうこつゞさろくろ

不思議(ふしぎ)にて見(み)る利(り)も有(あ)るもの
也(なり)ける〳〵人(ひと)ぞ我(われ)へ
丹(に)と知(し)る今(いま)ぞ〳〵
ふるさとやアわが産(うぶ)すなもやてくんが今(いま)
〳〵ぼう〳〵の一代記(いちだいき)と
ひろで十人(じふにん)が百人(ひやくにん)分(ぶん)
男(おとこ)ぶ夫(それ)でわけまなし
とてもそのまゝ通(とほ)りまづ
こゝが迷(まよ)ひ道(みち)
あり出(だ)すもあるもの実(じつ)也(なり)
アわく〳〵五(ご)万(まん)の財(ざい)ぶ
おめ人(ひと)をのるめ人(ひと)で
いつも辛(つら)〳〵親(おや)の
ぶ行(ぎやう)の目(め)ゝ
駄(だ)も出(だ)ぬ
うつぶ一生(いつしやう)の

脱の卵塔抔へ逆手に彫さるゝ名を焼夢こされ
ざるほど仕合さ施うそ
のつくとゝふ又空風
一生名のきるびらら汚を残さまじもこれが因
所を法さゝくいこれも伝仏ちる八橋さると支天
さ夏ゝそんまの耶摩に稲荷森の蔭ざらく何
もかも犯の罰ぶとあ〳〵われが恥〳〵も要〳〵
もれへよの中らおんなりんざ去ら私を捨ろとい

つてくんるもいうれんのさ女イエれ
ぢやア海ません何でもおら同ハテそでほ〳〵
ぶんナ今んで殖うやアあのこもろ〳〵折角今
までの訓染甲斐よあのこの名よ癪、月夜
ときせるを吹らくて歩ぶ行ほできせる行へ入ようで
悪人八苦もの生きで報後も内死ぬ公の因でふとてる
ざとほぶくヨヤわんれ名の火おぶりでそひ出よ記
法よ添さ髪の毛とこちん殖てふくんうせんひよ
つとうされちゃ虫の毒ぶ同前ふけるもの気

る都得し　切符ところかこれ月給の中を守り綺麗な
ものそ肌身そさず持ち　みそぶ今じやア却て
脇しい元一返ら取よう　いろ〳〵手を汚膝へ
苦れてもさうさる紙入ようもそこ
きせうのくそ紙にお救ようそくそ
おめくの部得も　紙屑の只そもー
うせん　五　十二ト　ヲヤさうてごうそ
まぐれ引され指んそる　六　ハ声アコレ
文の事　五　ムすんざと　巳　サ事
おめくにきろいお世話ぶり　到ても参くの私は

の内孔財ふい　一返　清て改て　詞へ勝まれてもそせ
ヘー　トムのうげのおようまご用ひそ　訳ら
うけそ紙込く　物もかもいそ　廊下出そする　晤ら　女ニ
神ふを
ぐてそうさんマアちィつと私生のいつこそも　五　ハテ
さてもろこそ飛ーわく　女　泊を
おくんうこまー私生ぶ　拭く　ちろこんまて
させヤ　ちアどこそもごう　扨がえ向せん　女ろ
めくマア旦那さんかちろこと　女　アイトをくりけ　巳　像の枚
うの方れ　ひてそこいらァ外のこ　仏　釜小そる

すつちやアチツト節が違やすヒ、お嬉しからうが女へ
さん〔トはなより壱弐升十三うりくらう〕若衆へとん彩川の
[船頭] ハテ四の五のも入りやせんすべて溺しも御座る
おめへも古親さん私も患ど ハテこアとんでもおかまひなせへ
やし [大ぜい] コレ おどんおめへが通さ [船] アヽヲ通ひなさるがよ
めらぐられむきこゝれ此菜木で芋でもうつて仕舞で
も言ひ〔ト廊下とびどけ出しつぶし小刀で表へ出〕山口楼前をふられてぐんぎとぐ川岸へ
もやいのつなをはやめでゆるへ [船頭] モシおかゆがありう [客] こぶがんきう出て私へう流るる

○船よりあわてゝ楼内の大ぜい娘かをとんきよくて ころ豆腐
どらぐやくちぐしくくけ出
えさんそうおまつちやアコウおどんやおせちめ
へお留めてくれ様へらか [船頭] 宝姥てふさぎ宝
れん〔トひとつですまいの綱を解き一ッぱざしてのりおそ
船出大ぜい川岸なぐくを格子まであつたおがら中試〕
やゝ云ひらけやゝ [大ぜいの声] ベチヤクチヤクチヤ〳〵〳〵〳〵
ガヤ〳〵〳〵〳〵 ベチヤクチヤ〳〵〳〵〳〵
ハイさすう〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵
とらふこく
おわり [作者曰] さしゝをすぐ〳〵〳〵〳〵と云ふ文字哉

横ゝ見神が浪の
道奥ゑで△り本

△私ハ新市場の中程ゟ取帳面を出して上乃
白を引ぬきハぐべみゟ紙をよこしまいかゝれてゐまそうた
分うゐ文字ありゐ細でゐんこゐ宛ハぐべ乃やゟ其ゐ文章

那ゟ
一乃ゟゟ
ゟゟ
ゟ行今ゟ

ゟれゟ
ゟゟふゟ
ぐゟゟゟ
ゟゟゟ
時ゟ
ゟゟ
ゟゟ
ゟゟ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

是より第五齣

辰巳七軒堀ゟ海親里迄世界

附言

来春二編出板仕候

抑ゝ人の性質行状善悪ある乎いまだ

知るべからざる前編長五郎と偕老の約を契りて

二客を癈し後編藤兵衛同穴の情と通じて簡

壮夫と倍来る必竟る処正是これ

トツチリ頽よ立久る乳房

船頭深話　大尾

吁薄情浮虚一三昧